

コマは回転しますが、いずれは止まりま
す。一方、歯車は自分の力では回りませ
んが、かみ合う他の歯車と共に回り続け
ます。さらに、その力を次の歯車へ受け渡
します。

*

全国数カ所の都道府県倫理法人会では、
後継者の育成を一年かけて行なう、「後継者
倫理塾」が開催されています。年度ごとに
開塾し、十数名の塾生が諸先輩経営者から
倫理経営を学び、自身の人間性を磨き、経
営力を培います。塾生にとっては、この塾
の課程の修了が終着点ではなく、その後か
らが本番となります。ある修了生のエピソ
ードを紹介します。

S氏は、祖父が創業し、現在は父が社長
となっている建設会社の専務です。大手ゼ
ネコンで働いた後、父の下へ就社。待つて
いたのは、想像とは真逆の現実でした。

会社では社長である父と常に衝突。家に
帰れば妻とは喧嘩が絶えず、S氏が企画し
た流行りのデザインの住宅は、閑古鳥が鳴
いていました。どうにもならない中で、父
から「後継者倫理塾」への入塾を勧められ
たS氏は、渋々入塾したのでした。

塾の講座では、心理テストがありました。
判定は「傲慢。わがまま。自己中心的」で
した。その結果にS氏は不満で一杯でした。
それを妻に告げると、「テストの結果は、そ
の通りだよ。わかっているじゃないの！」と猛撃
されたのです。ひどく嘆く妻の姿を見て、
S氏はこれまでの自分を顧みました。甘や
かされて育った子供の気持ちのままに、い

歯車のように 次へと力を受け渡す



つも嫌なことから逃げてきた自分がいまし
た。へこれではいけない」と反省したS氏は、
真塾に塾と向き合うようになったのです。

塾に通う中で、理解できた父の言葉があ
りました。「俺たちは技術屋だ」と言ってい
たことです。純粋倫理を学び、父の仕事ぶ
りに目が向くようになった時、「主役はお客
様だったのだ」と気づきました。会社を訪
れたお客様の幸せな思いを形にすることが、
自分たちの仕事だと知ったのです。それま
で、「儲かる家を作るべきだ」と主張してい
たS氏。父と衝突するのは当然でした。ま
た、企画が失敗した原因も、自分の考えの
浅はかさであることに気づいたのでした。

塾が修了した今、父への思いは反発から
尊敬へと変わりました。S氏が「後継者倫
理塾」を介し、父から受け取った言葉があ
ります。「創業者の思いを継ぎ、人に感謝し、
人へ奉仕する心こそが、経営の原点である」。
現在S氏は、「後継者倫理塾」の運営委員
となり、後輩の指導に力を注いでいます。

会社では専務としての自覚を深め、父の
右腕となって事業を遂行しています。今で
は「父のように、一步一步堅実に、経営の
道歩んでいきます」と、力強く述べるS
氏です。

すっかりとかみ合った歯車が力強く回転
し、周りの歯車を動かすように、周囲の人
を巻き込み大きな働きをする、リーダーと
なりたいたいものです。そのために必要なのは、
自分という歯車の原動力である「もと」に
心を向けることなのです。